

有機栽培



A to Z

農事暦を作る

家庭菜園だからこそ、もっと食の安心・安全にこだわって、人にも環境にもやさしい野菜作りをしたい。そんな方にお届けする有機栽培入門。家庭菜園ですぐに応用できるノウハウを紹介します。



サクラの花が咲いたらタネをまく

有機栽培では、化学肥料や農薬を用いなくて、できるだけ自然の季節に合わせることで、病害虫に強い丈夫な野菜を作ることが大切になります。そのためには、タネまきや苗の植えつけなどの農作業を適期に行うことが欠かせません。

「サクラの花が咲いたらタネをまく」という言葉を聞いたことがありますか。ここで言うタネは、キュウリ、カボチャ、ナス、ユダマメ、インゲンなどが挙げられますが、ソメイヨシノを含めたサトザクラの開花は、昔から農作業の、本格的な開始を示す大事な指標としてとらえられてきたのです。

これを単に、昔の農家の言い伝えとして片づけることもできます。しかし現在では、ソメイヨシノは一定以上の温度の積算時間によって開花が決まることや、まいたタネの発芽は地温と密接に関係することなどがわかっています。「サクラの花が咲いたらタネをまく」という表現もそれなりに根拠のあるものだと言えるでしょう。

指標になるのは、サクラのほかにコブシなどの開花になることもあります。また、5月にはフジ、6月にはショウブなどの開花が、別の農作業のタイミングを告げてくれます。さらには、渡り鳥のツバメやカモがやってきたらとか、カエルが土から出てきたら、トンボが飛び始めたらといった、生き物にまつわる表現もあります。これらをまとめて「自然の指標」と言います。

旧暦で農作業のリズムが見えてくる

農事暦（^{のうじれき}のうじこよみとも言う）に詳しい久保田豊和さんは江戸時代の農業の技術書である農書を調べるうちに、旧暦で考えることの大切さに気づいたと言います。

「実家は江戸時代からつづく農家で、父は『^{はつうま}初午が過ぎたからタネ^{もみ}粃をまくか』とか、『彼岸が開けたら稲刈りだ』と口にすることがあります。

農作業は初午、節分、彼岸、入梅、土用などといった^{ざっせつ}雑節（季節の移り変わりの目安となる日の総称）と結びつけて考えられていました。こうした季節の節目には地元で伝統的な行事がある場合がほとんどで、旧暦で考えると生活のリズムと農作業のリズムが密接につながっていることがよく見えてきます」

雑節のほかには、1年を24の季節に分けた^{にじゅうしせつき}二十四節気も農作業と不可分です。農家は何月何日といった日付よりも、二十四節気や雑節などで季節を意識して農作業を行っていたと考えられます。こうして、時期ごとの農作業や伝統行事などを暦にまとめたものが農事暦で、個々の農家や地域に独自のものが伝わってきました。

「旧暦と言っても、^{うるうづき}閏月などもあり、その年の気候の変化もあります。旧暦でその季節の農作業を意識しながら、自然の指標などによって、より細かくそのタイミングを補正していったのでしょう。地域によって言い伝えは微妙に異なり、同じ富士山の雪解けを見ている、畑のある場所が低地なのか山間部なのかによって、行える農作業は異なります。狭い地域に密着した経験則だからこそ、自然に合わせて行う有機栽培には意味があるのです」

なるべく頻繁に野良まわりに出かける

こうした自然のリズムをつかむには、畑やその周囲の変化をよく観察することが大切です。

「^{のら}野良まわりという言葉がありますが、野をよくするのが野良仕事。特に用がなくても田畑に足繁く出かけることで、季節の変化や作物に異変がないかなどを感じとることができます」と久保田さんは言います。

「おおよそ均質に条件の整った畑で行う慣行栽培なら、週末菜園でも十分に野菜が育てられます。また、病害虫が発生しても、農薬によって対処することも可能です。しかし、有機栽培では、自然のリズムに添った栽培をしながら、野菜に異変が発生する前に予防を心がけねばなりません。そのためには、やはり野良まわりです。週1回しか畑を訪れないのでは、サクラが咲いた正確なタイミングもわかりません。なるべく朝晩の行き帰りを利用して畑の様子を見たり、畑が遠くてそれが無理ならば家の周囲を散歩したりして、季節を五感で味わうことが大切です」

自分の畑に合った農事暦を作る

畑は、土地の高低、日光を妨げる木の有無、よく吹く風の向きなど、非常に狭い範囲の気象条件によっても左右されます。これを^{びきしやう}微気象と言います。観察を通して、最終的には自分の畑だけの農事暦を作ることが、有機栽培がうまくいく秘訣と言えるでしょう。

機会があれば、地元の農家に栽培のタイミングを示すような言い回しがないか聞いてみましょう。また、例えばダイコンならば、地元ではどのような品種が栽培しやすいかなどを聞いてみるのもいいでしょう。

花の開花や虫や鳥の出現、天候の変化、行った農作業、病害虫の被害など、気づいた点を併せて、日記に記録します。5年連用日記などを使うと、より年の変化がわかりやすくなり

ます。久保田さんは3年目あたりから、畑や自然を観察する目が深まったのが実感できたそうです。

農書などから学びえた栽培の知識は、実践を通して、独自の知恵へと高められていくはずです。こうした知恵の集積が有機栽培の上達には欠かせません。

久保田さんからのメッセージ

「有機栽培はまずできることを取り入れることから」

有機栽培のテクニックは栽培する人によってそれぞれです。有横栽培でもポリマルチは使うのか、それとも雑草を草マルチにするのかなど……。最初は慣行栽培からスタートし、自分がしたいこと、実践可能なことを考え、少しずつ有機栽培のテクニックを取り入れていくのも一つの考え方です。

教えてくれた人



久保田豊和さん くぼた・とよかず 1965年、静岡県生まれ。静岡県立田方農業高等学校教諭を経て、県教育委員会に勤める。1980年代後半に農書に出会い、農事暦や旧暦の研究に取り組む。著書に『暦に学ぶ野菜づくりの知恵 畑仕事の十二月』（家の光協会）がある。

自分の農事暦の作り方【入門編】

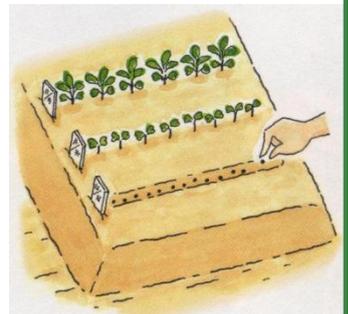
5年連用日記に記録する久保田さん。日記を開けば例年の記録をつぶさに見ることができる。

オリジナルの農事暦を作るには、コツコツと書き溜めていく根気も必要だ。



A 栽培に関する記録をつける

- 1 例えばコマツナなどの葉菜類を、1週間ずつ、または2週間ずつなどと時期をずらして播き、どの時期がもっともよく育ったか記録する。播きどき（適期）がわかる。
- 2 同じ野菜の^{わせ}早生、^{なかて}中生、^{おくて}晩生の品種を集めて、どれがよく育つかを試す。生育の良い品種を見つける。
- 3 慣れたら、例えば「年末にダイコンがほしい」といった場合に、収穫日をあらかじめ決めて、タネのまきどきを逆算してみる。自分の畑での、その年の気候の変化などがわかる。時期をずらして葉菜類のタネをまいた畑の例。一番手前がタネをまいたばかりの列。列の横にはまいた日付を記入したプレート差しておく。



B 地元の伝統的な行事や言い伝えを記録する

夏祭り、収穫祭などの祭り、「山の雪が解けたら」「〇〇の花が咲いたら」などを調べる。

C 自然の指標を観察して記録する

花木や草花の開花時期、虫の発生時期、渡り鳥の飛来時期などを観察する。

花による栽培開始の目安

畑の周りで咲く花を見て、栽培開始時期のヒントにしてみよう。農作業は、その土地の気候、畑の環境や育てる品種によって違いがあるので、経験を積み重ねながら、最適期を見つけるとよい。

時期

◆咲いている花

・タネまき・植えつけ適期の野菜

2月中旬～

◆ウメ、ヤブツバキ

・ジャガイモ

3月上旬～

◆レンギョウ、ジンチョウゲ

・ニンジン、ダイコン、コマツナ

3月中旬～

◆コブシ、ボケ

・ネギ、ゴボウ、ミツバ、小カブ、ラディッシュ、ホウレンソウ

4月上旬～

◆ソメイヨシノ、ボケ、モモ

・スイカ、キュウリ、カボチャ、シソ、サトイモ、ネギ（定植）

4月中旬～

◆チューリップ、ヤマブキ

・トウモロコシ、エダマメ、インゲンマメ

5月上旬～

◆フジ、シャクヤク、ポタン

・ニガウリ、ラッカセイ、オクラ、モロヘイヤ、ナス（以下、定植）、トマト、スイカ、キュウリ、カボチャ

5月中旬～

◆ツツジ、アヤメ

・サツマイモ、ゴマ

6月上旬～

◆ショウブ

・ダイズ、ニンジン、アズキ

7月上旬～

◆アサガオ

・ニンジン、キャベツ、ブロッコリー、カリフラワー、ネギ、秋まきの豆類

8月中旬～

◆オシロイバナ、ケイトウ

・ニンジン、ハクサイ、ワケギ、ソバ、レタス

9月上旬～

◆ハギ、コスモス

・ダイコン、ホウレンソウ、タマネギ、秋まきの葉菜類

9月中旬～

◆キク、ダリア

・コマツナ、ホウレンソウ、イチゴ（定植）

9月下旬～

◆ヒガンバナ、キンモクセイ

•ネギ（定植）ゴボウ、ミツバ

11月上旬～

◆カエデの紅葉、サザンカ

•エンドウマメ、ソラマメ、麦、タマネギ（定植）、アスパラガス（株分け）



NHK趣味の園芸『やさいの時間』2012年12月号